

ボールゲームにつなげるための投運動の導入遊びについて

On the Introductory Activities for the Ball Games

大 森 宏 一

OOMORI Kouichi

【要約】

子どもの運動能力の中でも特に投運動についての遊びの導入方法と運動能力について調査した。遊びを導入した結果、投運動の能力が高くなるとの仮説から調査を行ったが、遊びが深まらなかった。測定調査結果では、男児は横ばいであったが、女児の結果は上昇した。今後、遊びの導入方法や遊び方、遊びの種類についてさらに調査していく必要がある。

キーワード 投運動 投げる遊び ボール遊びへのつながり

I 問題の所在

1) 子どもの体力の現状

スポーツ庁における平成 29 年度の全国体力・運動能力、運動¹⁾によると平成 20 年の調査開始以降の推移では男子はほぼ横ばい、女子は向上傾向にあるとされている。しかし昭和 60 年度の調査結果と比較できる項目については依然として平均値を下回っている。

特に、ボール投げについては小学校 5 年生の結果が低く、平成 22 年度以降も低下傾向にあるとしている。

2) さまざまな機関の体力低下への取り組み

平成 20 年代ごろから各教育委員会などは、全体としての体力低下と体力の 2 極化現象の問題を受けてさまざまな取り組みがなされてきておりその効果も少しずつ表れている。

スポーツ庁の報告¹⁾より走力・跳力・投力について結果が向上している小学校では、①体育振興会によるクラブ活動の指導、②全身を使って運動する感覚を学び、走跳投につながる基本動作の習得、③学校、学年、児童の目標を設定し、年間を通じた運動時間を確保、④児童と教師が先を見通し継続的に体力の向上の取組を行うように見直すといったポイントとして行ったところは向上したと報告している。

その中でも、長野市では幼児期の「遊び」から児童期の「運動」にかわる中で「運動離れ」が進んでいることから幼少連携を意識した運動と遊びのプログラムを普及させて能力の改善に取り組んでいる。

3) 投運動の向上へ向けた取り組みと課題

埼玉県²⁾では、投運動の向上に向けた取り組みをさまざまな教材や教具を取り入れてお

こない運動能力向上において効果を上げている。ただし、その報告書の中で、子どもの現状として普段の生活において思い切り投げることができない環境にあることが協議されている。林³⁾は、公園のボール遊びについて禁止している公園は確かに多いようであり、2013年に「子どもの遊び場に関する基本条例」を施行した千代田区においても時間を指定しておりその時間以外はボール遊びを禁止している。公園で子どもが気軽にボール遊びを楽しむ機会と場所が少なくなっていることを報告している。

投運動に限らず、子どもの体力低下の原因として、時間、場所、仲間の減少が大きな問題であることは考えられる。しかし学校教育の中でどのように取り組みがなされたかという点では疑問が残る。実際に現代の小学校にはグラウンドがあり、体育の授業も学年によるがおおむね年間約 100 時間が確保されるようになっている。時間と場所については少なくとも確保されており、仲間においても僻地や離島などを除くと特に問題があるとは思えない。体育の時間の在り方、休み時間や放課後時間の活用、など取り組めることは検討できると思われる。

II 課題

1) 保育幼児教育の現場での課題

保育幼児教育の現場において投運動は、保育者の運動経験と専門性が大きくかかわってくると考えられる。幼児教育の現場では遊びを通した学びが中心ではあるが、どのような遊びを仕掛けるか、またそれをいかにつなげて遊びを広げ深めるかを実際に行うのは現場の保育者である。保育者の運動に取り組む意識によって子どもの運動能力に違いがあるといわれている。また投げる運動は、遊びの中で特に意識をして行わないとなかなか能力が上がらず遊びが広がらないと考える。

2) 幼少連携の課題

幼児教育、幼小接続に関する現状について⁴⁾の資料から、幼少接続の課題として①幼稚園教育と小学校教育がどのようにつながっていくのか具体化することが難しい。②教育の相違点について、幼稚園、小学校が十分に理解・意識していない。③幼稚園または小学校が、接続した教育課程の編成に積極的ではない。という 3 点を挙げている。

また、具体的な幼少の交流については、「ステップ 2」^{註1)}が 62.1%と最も多くなっており「ステップ 4」に至っては 3.2%である。

このように、幼少の連携は十分とは言えず、互いの歩み寄りが必要である。

3) 保育幼児教育現場での取り組みの検討

今回の新しい幼稚園要領では、前項の幼少接続を意識した幼稚園卒園までに育ってほしい姿を記載している。さらに小学校ではこれを受けてスタート・カリキュラムを策定し、幼児期での遊びを基盤として徐々に各教科へ移行していくように配慮している。

これらのことより、保育幼児教育現場での遊びはどのように進めることが良いか、検討したい。

4) 遊びから体育へのつながり

幼児期の遊びと保育現場での援助と運動遊びから小学校体育へのつながりについて

「遊び」のとらえ方は、研究分野や研究者の中においても様々であるため難しい。しかし保育現場における遊びは、子どもの成長や発達に欠かせないものであることを示していく必要がある。杉原⁵⁾は、遊びを「自己決定と有能さの認知を追求する内発的に動機づけられた状態である」とした考え方を示している。ただし、幼児期の遊びは内発的動機づけを主にするが、外発的な動機づけも全くないということではなく、バランスが大切であり、なるべく内発的な動機付けが多くなるような援助が求められている。

はじめは保育者のかかわりや援助が多い遊びでもそれが自由遊びの時間にどれだけ子どもが自発的にその遊びに取り組んで遊びの探究を始め本質的な面白さを味わっているかを見極める必要がある。特に気をつけなければいけないのは、保育者の言葉がけであると考えている。優越動機や顕示動機を誘発し強化するような言葉がけが多いと、うまい下手が問われるような遊びにおいては勝利至上主義の考えを助長すると思われるため、保育者の意識とその遊びのねらいを明確にしておく必要がある。

このような内発的動機づけを高めることについて岡澤⁶⁾は「保育のねらいをもちながら、非支持的な言葉がけで子どもの自己決定感を育て、子どもの状況に応じて受容的な言葉がけをしていくように指導することが必要である」としている。幼児期の運動遊びの場面では、小学校体育のような技術技能の結果よりも、運動遊びの持つ本質的な楽しさを実感できる援助が求められる。

幼児期の運動遊びは、運動を楽しむこと、運動が好きになって自ら楽しむことが大切である。幼児期は、「運動」を「身体を動かすこと」ととらえず、「夢中になること」ととらえている。身体を動かすことととらえるとうまく動かせたかどうかの評価となるが、夢中になることととらえるといかに楽しんで主体的に深く取り組めたかという視点になると考えている。これは結果的に、楽しいから遊びを続ける、身体を動かす機会が増える、身体をコントロールする力が備わる、動きが滑らかになっていく、体育に必要な基礎づくりができるということにつながる。

このような視点から、運動遊びにおいて子どもがいかに遊びの中で夢中になれる運動を保育者が環境設定として仕掛けていくか、またそのことにより、ねらいの目標達成ができるかを調査したい。

特に、今回は投げる運動に着目して調査を進めた。小学校体育編においてのゲームは「ボールゲームや鬼遊びのこと」で、幼児期に鬼遊びを存分に楽しむことはもちろんであるが、ボールを使った遊びを取り入れることは幼少接続の点からも重要であると考えられる。またボール遊びでは、投げる、捕る、蹴るといった基本技術を取り入れた遊びを意識的に遊びに取り入れることが重要であるが、幼児期は遊びを通していかに取り入れるかを考えていくことが重要である。

Ⅲ 研究の目的

本研究では、遊びの中で投げる動きを取り入れることによって投げる運動能力の向上へつながるかという点と遊びの中でいかに投げる運動遊びを取り入れることができるのかを検証することを目的とする。

IV 研究方法

1) 被験者

富山県内の認定こども園の在園する年長児 35 名とした。また測定時は保育者に目的を説明し園児にも口頭で話をして了解を得て実施した。

2) 保育現場での取り組みの計画

投げる遊びをどのように取り入れるかを考えた場合、保育現場ではキャッチボール遊びをいきなり行うことは難しい。キャッチボール遊びは、投げる、捕る、の基本を両方おこなえるボール遊びの基本ではあるが、幼児期の子どもにとって、投げるときと捕球するときのボールの大きさだけを考えても、投げるときは小さいボールの方が持ちやすく投げやすいが、捕球するときはそれよりやや大きめのボールの方がとりやすい。またキャッチボールではコントロールが定まっていないとボールを取りに行くことに時間を使い、実際に投げる、捕るといった本質的な楽しさを持った遊びにならないことが多い。

子どもの遊びは、発達段階を考慮して遊びを繋げていくことが大切である。キャッチボールの前に投げる遊びだけを切り取り発達に応じた遊びの仕掛けを考えてみたい。

最初に投げることの前の初期段階としての遊びを仕掛けた。次に投げる遊びでは、腕を回す、投げるものをつかみタイミングよく離す、さらに体重移動と体幹のひねり動作を分ける遊びを日常に取り入れ、その後、実際に投げる遊びを取り入れた。

3) 遊びの実施時期

遊びの時期については下記の①－1～②－2までを週ごとに変化を持たせて行うことを計画し 2018 年 10 月から 12 月にかけて自由遊びの時間に行った。

①－1 腕を回す

子どもたちが、高いところの的に腕を回して手でタッチする遊び。保育者が子どもに応じて高いところに手をかざしてハイタッチする。高い目標に向かってタッチする動作を取り入れてまず腕をスムーズに回す動きを取り入れたいと考えた。

①－2 腕を振る

棒の先にリボンをつけたものを使って遊ぶ。新体操のリボンの要領でリボンをさまざまな動きで動かすことにより、体幹との連動や手首の柔軟性を促進する狙いとした。

②－1 投げる運動遊び

今回は、紙飛行機、ロケット、X ジャイロを使つて的を目標に投げたり飛ばして遊ぶ。ここでは筆者が作成した手作りのもので自由に遊ぶこととした。



(図 1 X ジャイロを使った遊びの様子)

②-2 スナップとボールを離す(リリース)動きを意識する遊び

紙の 3 枚羽ブーメランを使っての遊びを導入した。ブーメランは投げるときスナップを利かせないとうまく投げられないこと、また離すタイミングを意識しながら離さないとうまく投げられないこと、さらに戻ってきたときにゆっくりではあるが捕球につながる遊びであることから導入した。

上記のように①-1~②-2 までの段階を踏まえて遊びを取り入れるように考えた。

体重移動と体幹のひねり運動においてはそれだけを取りだして遊ぶことはおこなっていない。

4) ボール投げの測定

今回は、テニスボール投げを用いて測定を行った。測定の方法は、文部科学省による、幼児の運動能力調査⁷⁾をもとに測定を行った。

測定日① 2018 年 9 月 4 日 園庭 10:00 頃 気温 28.9~33.0 晴れ

測定日② 2018 年 12 月 7 日 遊戯室 13:00 頃 気温 15.3~24.8 室温 18.0~20.0 雨

V 結果と考察

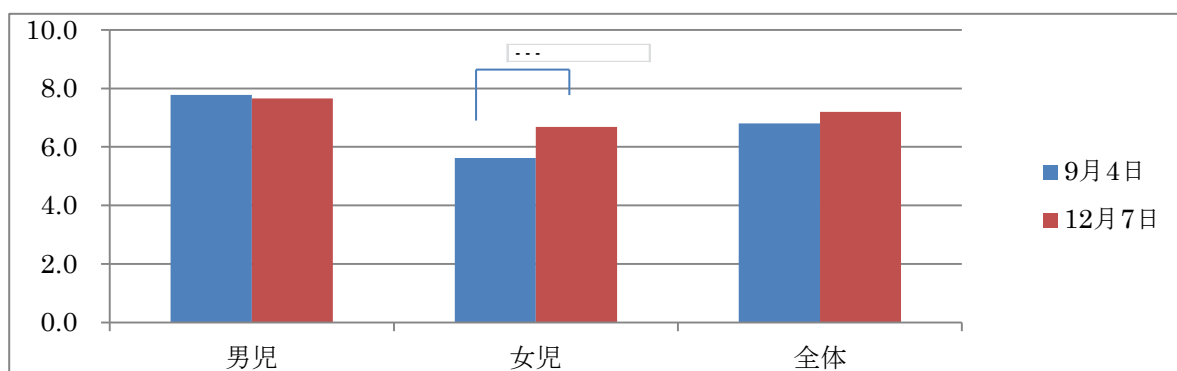
検証においては、投能力の測定と保育者からのインタビューを行った。

1) 表 1 の統計処理は、平均値、標準偏差(SD)および t 検定により示した。また今回の研

究では、 p 値が 0.05 未満を統計的に有意とみなした。(表 1 参照)

結果は、女児が 5.6m から 6.7m と約 1.1m 記録が伸びた ($p < 0.05$)。男児は変化なしであった。全体としては 0.4m 増であった。

表1 ボール投げ測定記録						
		9月4日		12月7日		
	N	M	SD	M	SD	P
男児	18	7.8	3.4	7.7	2.0	0.828
女児	17	5.6	1.7	6.7	1.9	0.015 ***
全体	35	6.8	9.8	7.2	9.8	0.191
						*** $p < 0.05$



2) 現場保育士への聞き取り調査

実際に、普段の遊びの中でどのように取り組んでいたのかを聞き取り調査した。

年長クラス担任：幼稚園教諭 1 名

日時：12 月 19 日(水) 16 時 50 分から 17 時 15 分 25 分程度

内容：各遊びでの様子を聞き取った。

聞き取り調査結果：

① リボンでの遊びについて

一学期にミニミニ運動会においてリボン遊びをおこなっており、9 月からもよく遊んでいた。

② ブーメランおよびロケット遊びについて

男児は興味があり夢中で遊ぶが、取り扱いが難しく壊してしまうケースも多かった。特に、ブーメランは 3 枚羽の中央の接続部分が外れやすく投げる遊びとして機能していない状況があった。また投げることにキャッチする子に分かれる傾向があった。

③ 紙飛行機あそびについて

サイズが大きすぎてなかなかうまく飛ばせないため、遊びが続かなかった。

④ X ジャイロについて

的に段ボールで作成したサメの形のものを置いていたが、それに興味をもって投げる遊び

を楽しめた。

⑤性別による遊び方の違いについて

男児：投げることに興味はあるが、力いっぱい投げたいとの思いからうまくリリースできないので遊びが続かず、ふざけてしまう様子が見られた。

女児：投げる遊びそのものに興味を示している様子が伺えた。

また女児の K は(6.5m から 8.0m と伸びた)、投げる遊びに興味を持ち落ち着いて取り組んでいたため、X ジャイロなど非常にうまく投げられるようになっていた。普段の遊びではこのような能力がわからなかったと話された。

VI 測定結果と保育現場における実践での課題

今回の結果では、男児は変化があまり見られなかったが、女児の記録が平均で 1 m 程度伸びた。普段のあそびのなかで 男児と女児がどのようにボール投げの遊びにかかわっていたのかを聞き取り調査を行った結果から、投げる遊びの環境設定と保育者の遊びへの興味もかわってくる。今回は、特別に筆者から投げる運動をお願いしたため、普段の設定保育のなかで年間を通して子どもの様子から遊びを組み入れることができなかったため、なかなか遊びが続かないことが多くあったようである。

エピソードとして

今回、保育施設において投運動の第 1 回目の測定を行った時のことである。テニスボールを使った測定の際に名前を呼んで投げるテストを行ったが、興味深かったのは、測定後の子どもの様子であった。今回テスト終了した直後の子どもは、筆者の行った測定役と投げる子どもを演じる被験者役に分かれてテスト遊びがはじまった。子どもはテストそのものを遊びとしてとらえてしまっているようだった。またテスト結果の投距離が長い短いよりも、名前を呼んで一人ずつ投げる、そして計測してボールを投げ返すといったテストの形式自体を楽しんでいる様子が伺えた。測定そのものが遊びを通しての体験であったことをエピソードとして報告したい。

VII 今後の課題

普段の保育の中で、投げる遊びを取り入れて行ったが、なかなか遊びが継続しない状況があることが分かった。保育施設では、運動遊びのほかにもさまざまなねらいをもった遊びが次々と展開されている。その中でいかに保育者がねらいをもった遊びを提供し継続させることができるかは大きな課題であると改めて感じた。

投げる遊びから、ボール遊びへそして生涯スポーツへとつなげるために運動が好きになることと基本的な運動能力を高めたいという思いから今回研究を行ってきた。女児においては少なからず研究成果が見られたものの、男児においては結果としては横ばいであった。聞き

取りからも男児は思い切り投げたい、力いっぱい投げたいという思いがあるように感じた。そのような思いを今後の遊びに生かせるように検討したい。

さらに、キャッチボールからゴール型ボールゲームやベースボール型ボールゲームへつなげることができるような遊びの援助方法を模索したい。

また、内発的な動機付けを促すような言葉がけについての検証はおこなうことができなかったため、この点についても今後の課題としたい。

謝辞

本研究の調査にあたり、N 市 D 認定こども園の園長先生、教職員の皆様、並びに子どもたちのおかげで調査を実施することができました。この場をおかりして感謝いたします。

註 1) ステップ 0~4 までの段階を示したもので数値が大きいほどより接続への検討がなされている状況である。引用文献 4) p 25 参照

引用文献

- 1) スポーツ庁 平成 29 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果
http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/kodomo/zencyo/1401184.htm 2018 年 11 月 16 日アクセス
- 2) 埼玉県立総合教育センター 平成 23 年度 学校体育担当研究報告書 「埼玉県の体力課題“投力”の向上のために(一年次)」 http://www.center.spec.ed.jp/d/h23/361_H23_kenkyu_throwing.pdf 2018 年 11 月 16 日アクセス
- 3) 林英樹「公園のボール遊び」は本当にダメなのか 2015 年 11 月 9 日 日経ビジネス <https://business.nikkeibp.co.jp/atcl/opinion/15/221102/110600099/> 2018 年 11 月 16 日アクセス
- 4) 幼児教育、幼小接続に関する現状について 文部科学省 教育課程部会 教育課程企画特別部会(第 6 回) 配付資料 p19 2015 年 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/__icsFiles/afieldfile/2015/05/25/1358061_03_01.pdf 2018 年 11 月 16 日アクセス
- 5) 杉原隆 幼児期における運動発達と運動遊びの指導 ミネルヴァ書房 2014 年 p34
- 6) 岡澤哲子 運動遊び場面の保育者の言葉がけに関する保育者養成における指導上の観点について - 内発的動機づけを高めることをねらいとして - 帝塚山大学現代生活学部紀要 第 12 号 pp57 - 64 2016 年
- 7) 文部科学省 幼児期の運動能力調査 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/__icsFiles/afieldfile/2011/04/07/1304379_1.pdf 2018 年 12 月 13 日アクセス